

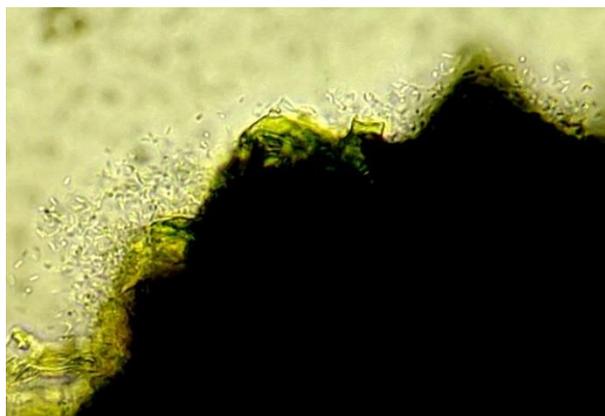
メロンの「褐斑細菌病」と「べと病」

メロンの褐斑細菌病（左図）と、べと病（右図）は、両方とも初めは黄褐色小斑点として現れ、その後拡大して葉脈に沿った大型病斑となるので、肉眼だけでは区別しにくいことがあります。それぞれ、細菌病と糸状菌病（偽菌類・卵菌類）であり、薬剤対応が全く異なるので、顕微鏡を用いて確実に診断して下さい。



褐斑細菌病は、その名のとおり細菌病ですから、病斑の健病境を切り取り、水を一滴たらしたスライドガラスに載せカバーガラスをかけて観察すると、断面から病原細菌が滲み出てきます（左図）。マウント液やラクトフェノールなど固定液を使うよりも、かえって水のほうが細菌の流出を妨げず、観察に適しています。

べと病は糸状菌病ですから、よく見ると葉の裏面にカビが生えていますが、古い病斑や、薬剤散布後の病斑ではカビが見えにくいことがあります。そのようなときは、葉の裏面にセロテープを軽く押し当てると、カビだけが移し取られ、容易に観察することができます。樹枝状に分枝した枝の先にラグビーボールのような孢子がついているところが見られます（右図）。



注）セロテープをスライドガラスに貼り付ける際の水はごく少量（テープ2cmにつき4 μ lくらい）です。多いとテープが浮いて観察し難くなります。見た目では右図のようなくらいです。

